

## ～置賜の中世の謎を解く鍵～ 永仁二年磨崖板碑

県指定有形文化財（歴史資料）

赤湯の温泉街の北に続く地域が清水町で、約 30 戸の家々が旧最上街道に沿って並んでいます。東正寺東側の旧国道に面した約 4m の凝灰岩の岩壁に、上段に 5 基、下段に 10 基の板碑が刻まれています。

上段の 5 基が県指定の文化財になっています。薬研彫り<sup>やげんぼ</sup>で深く刻んだ種子<sup>しゅし</sup>は、その仏に対する強い帰依の心を表しています。このうち右側の 3 基は阿弥陀三尊の板碑で中央にキリク（阿弥陀）右にサ（観音）左にサク（勢至<sup>せいし</sup>）が刻まれています。左側の 2 基は同じ型でやや小さく、右にキリク、左にアク（不空成就<sup>ふくうじょうじゆ</sup>）が刻まれています。5 基に一連の銘文が刻まれています。風化のためすべてを解読することは困難です。

さて、この磨崖板碑は、誰が作ったものでしょうか。向かって右に「右志者為/孝子敬白/平吉宗精霊」とあることから平吉宗の霊を慰めるため、吉宗の息子が建てたものと考えられます。2 番目の板碑の「件志者為悲/永仁二甲午秋天/母幽儀第三年」の銘文から、時期は永仁 2 年であることがわかります。永仁 2 年の年号は、西暦 1294 年の鎌倉時代末のことで、置賜一円が長井荘とも呼ばれ、大江（長井）氏が代々地頭となって支配していた時代です。

しかし、平吉宗という人物はいろいろな歴史の文献を見ても出てきません。東正寺の古碑に出てくる伊達式部少輔や、平の姓から北条方の平頼綱、平政盛などとの関連が議論されていますが、よく分かっていません。

この磨崖板碑について、もう少し周りの様子をみてみましょう。この付近には赤湯北町の八幡神社旧社や東正寺、深山寺<sup>しんざんじ</sup>など平安時代末から南北朝時代に由緒が遡る社寺があります。これらを結ぶ山沿いの道が旧最上街道以前の古い道となっていて、この磨崖板碑のすぐ前を通っていたと考えられます。

また、このすぐ下に庚申講<sup>こうしんこう</sup>信仰の磨崖碑、南側に深山寺別当新山家の歴代墓地があり、地域の人々にとって代々この磨崖板碑は特別な聖地とされていたことがわかります。



▲種子<sup>しゅし</sup>が深く刻まれている上段の 5 基

自然の大きな岩に平一族の 5 基もの板碑を彫り刻むという経済的、政治的な力は相当なものです。平吉宗なる人物が解明されると、置賜の中世の歴史がとても鮮明に浮かんでくるわけで、この磨崖板碑の重要さが見直されています。

南陽市文化財保護審議委員 佐藤庄一  
平成 25 年 11 月 1 日号 市報なんよう掲載